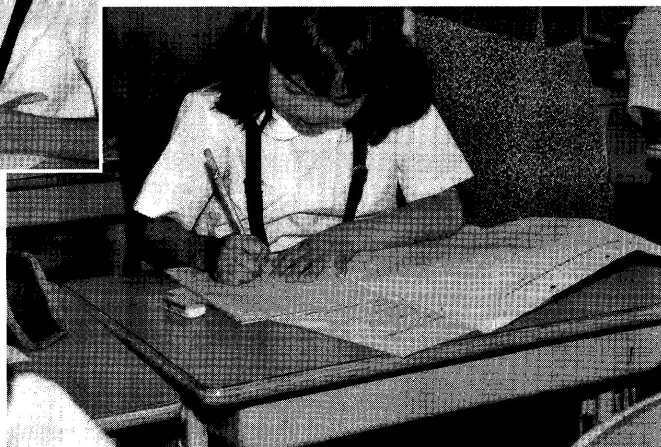
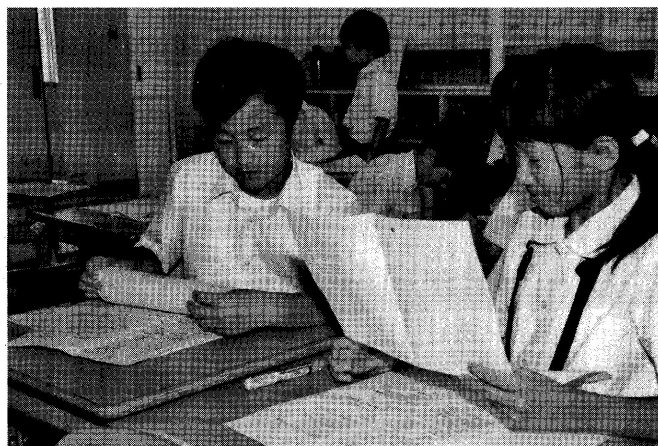


国語科の研究

佐藤 浩一



キーワード

望ましい人間関係 対話的活動 感想・意見文

主張

本研究では、「望ましい人間関係を求め、よりよい表現についての認識を創りあげる子ども」を目指し、その具現のために「対話的活動」に着目した。「望ましい人間関係」と「対話的活動」を以下のように定義する。

【望ましい人間関係】：心情や考えを伝え合って、相手とより深く分かり合う関係。
【対話的活動】：共通体験をしたペア同士で「伝えたい相手」への相手意識を伴ったコメントをし合う活動。

まず、意味マップをもとにした対話的活動を学級のペアと繰り返し行う場を設定することで、「伝えたい相手」と「もっと気持ちや考えを伝え合って、深く分かり合いたい」という意欲を高め、相手に応じた適切な表現について見通しをもつことを期待する。モデル教材文を検討したり、「感想・意見文」の下書きをもとにした対話的活動を繰り返し行ったりする場を設定することで、より適切な表現を考え、練り上げていくことを期待する。

このように、対話的活動を繰り返し行うことで、深く分かり合いたいという意欲と適切な表現の両方が螺旋的に高まっていく子どもの姿を明らかにした。

I 望ましい人間関係を求め、よりよい表現についての認識を創りあげる国語科

1. 国語科で求める子ども

研究主題「創造的な知性を培う」のもと、国語科では、「望ましい人間関係を求め、よりよい表現についての認識を創りあげる子ども」を目指す。

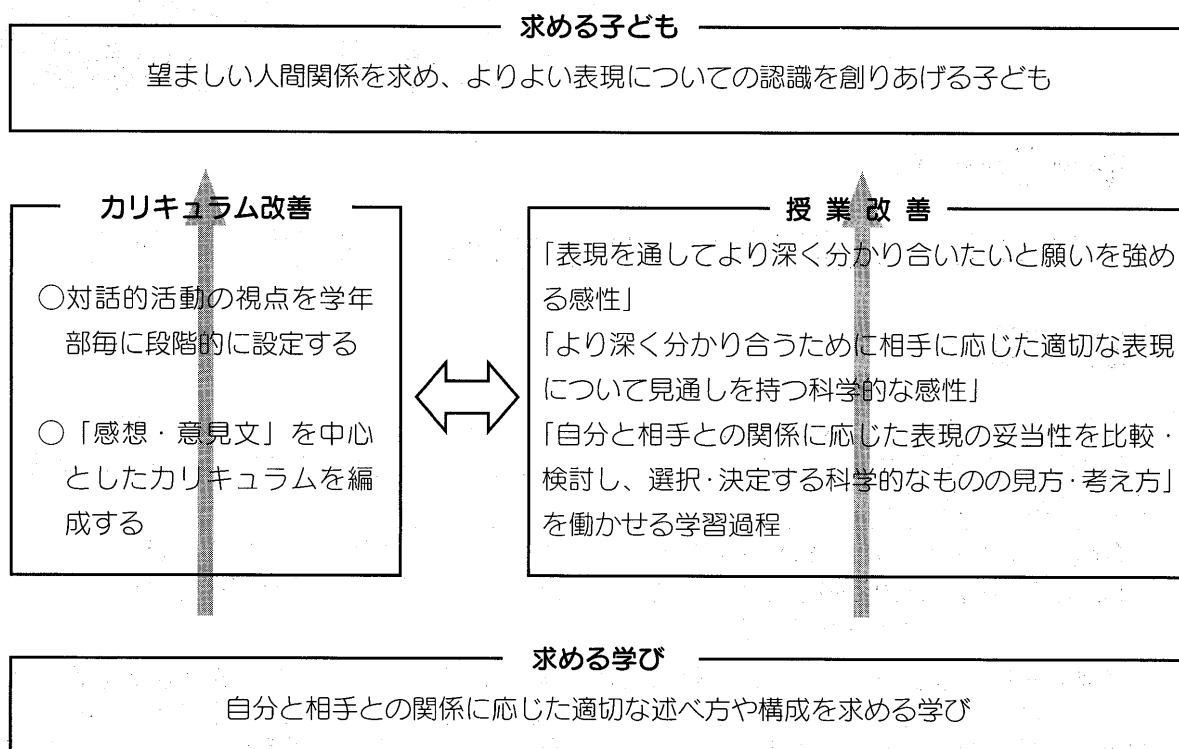
言葉で伝え合う力の重要性が叫ばれている現代社会において、異なる価値観を持つ他者と望ましい人間関係を築くために、言葉を通してよりよい表現についての認識を創りあげることは、国語科に期待される重要な役割の一つである。

本研究での「望ましい人間関係」とは、「心情や考えを伝え合って、相手とより深く分かり合う関係」である。「望ましい人間関係」を求めることで、深く分かり合いたいという意欲と適切な表現の両方が螺旋的に高まることを期待する。

これまでも国語科の授業では読み手を意識して書く「相手意識」を大切にしてきた。しかし、表現した結果を分かりやすく伝えるための「手段としての相手意識」に留まることが多かった。本研究では、意味マップや作文の下書きをもとにした「共通体験をしたペア同士で『伝えたい相手』への相手意識を伴ったコメントをし合う対話的活動」を繰り返し行うことで、「伝えたい相手」ともって深く分かり合いたいという「目的としての相手意識」にまで高める。そして、意味マップやモデル教材文を活用することで表現も高めていく。

深く分かり合いたいと意欲を高めることで、相手と自分との関係に応じた表現の妥当性を比較検討し、より適切な表現を選択・決定していく子どもの姿を期待する。

このような学びをカリキュラム改善、授業改善により具現していこうと考えた。



2. 望ましい人間関係を求め、よりよい表現についての認識を創りあげるカリキュラム改善の視点

(1) 対話的活動の視点を学年部毎に段階的に設定する

意味マップや作文の下書きをもとにアドバイスし合う対話的活動を次のように設定する。

低学年：【よさの指摘】対話的活動を行う喜びを味わうために、よさを指摘し合う。
 中学年：【指摘・改善】表現のよさに目を向けながら、直すとよりよくなる点を指摘し合う。
 高学年：【協働的解決】具体的な表現の解決策を提示し合う。

(2) 「感想・意見文」を中心としたカリキュラムを編成する

「感想・意見文」とは、「自分が生活の中で強く感じたことや考えたことを意見として述べる作文」である。よりよい人間関係を築く上で、互いの考えを伝え合い、理解し合う基礎にもなる。「感想・意見文」は、求める子ども像に向かう上で最適なジャンルである。

これまでの意見文指導では、そのテーマとどう向き合ったのか、自分に目を向けることに弱さが見られた。そこで、次のような「感想・意見文」の視点を設けてカリキュラム編成する。

低学年：【感想中心】自分が生活の中で強く感じたことを書く。
 中学年：【感想+意見】自分が生活の中で強く感じたことや考えたこと、今後の自分のめあてなど、テーマに対して自分はどうかであったかを中心に書く。
 高学年：【意見中心】テーマと自分との関係を振り返りながら他者に提案する意見を書く。

3. 望ましい人間関係を求め、よりよい表現についての認識を創りあげる授業改善の方策

「感性、科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」を働かせる学びの学習過程を次のように構想した。

< 学 習 過 程 >	< 教師の働きかけ >
<div data-bbox="240 981 823 1025">醸成活動</div> <div data-bbox="240 1070 823 1115">学習計画立をてる。</div> <div data-bbox="240 1137 823 1227"> 相手とより深く分かり合いたいという願いを持ち、述べ方や構成の仕方など作文の構想に目を向ける。 【問いの発生】 </div> <div data-bbox="240 1238 823 1373"> 対話的活動① 相手とより深く分かり合うための表現の見直しの視点を持つ。 【問いの焦点化◎】 </div> <div data-bbox="240 1406 823 1485"> 書き手が表現の妥当性を比較検討し、表現を選択・決定する。 対話的活動② 【問いの解決】 </div> <div data-bbox="240 1518 823 1641"> 新たに導入された表現の論理や構造のよさを獲得したり、問い直したりする。 </div> <div data-bbox="831 1003 871 1216">相手意識の拡張</div> <div data-bbox="831 1261 871 1373">絞り込み</div> <div data-bbox="831 1473 871 1529">統合</div>	<div data-bbox="983 1003 1015 1339">感性 科学的な感性 科学的なものの考え方</div> <div data-bbox="1031 969 1412 1641"> ・他教科・領域、生活体験と関連した活動。 ①伝えたい相手とその相手と目指す関係を学級全体で確認する学習計画を立てる話し合いの組織。 ②意味マップをもとに複数のペアとアドバイスし合う対話的活動①の場の設定。 ③モデル教材文の表現のよさを話し合う活動の組織。 ④「感想・意見文」の下書きをもとに複数のペアとアドバイスし合う対話的活動②の場の設定。 ⑤自分の表現を見直す場の設定。 ⑥伝えた相手から読んだ感想をもらったり、相手へのお礼の手紙などを書いたりする場の設定。 </div>

4. 新たな評価方法の開発

「科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」の働きについて次のような方法で評価する。

- ・意味マップの記述の変化と対話的活動についての振り返りから、「科学的な感性」がどのように働いたかを評価する。
- ・下書きから清書への変化とその後の学習の振り返りから「科学的なものの見方・考え方」がどのように働いたかを評価する。
- ・題材の変化や相手の変化による「リライト作文」の記述と記述後の振り返りから、単元で学習した内容がどの程度定着しているか、及び「科学的なものの見方・考え方」がどのように働いたかを評価する。

Ⅱ 実践の概要

第4学年 「仲間に伝えよう！ お年寄りとふれあって考えたお年寄りのイメージ」

1. 自分と4年1組の仲間との関係に応じた適切な表現を求める学び

本単元では、お年寄りとのふれあ体験を「感想・意見文」のテーマとして取り上げる。ふれあ体験をしていない4年1組の仲間へ「感想・意見文」を書いて伝えることにより、4年1組の仲間と深く分かり合いたいという願いを高め、より適切な表現についての認識を創りあげていく子どもを目指した。

具体的には以下のような学習を構想した。まず、お年寄りのイメージとその理由を書いた意味マップをもとにした対話的活動の場を設定する。ペアとの対話的活動を通して、伝えたい考えがはっきりすることで、「4年1組の仲間とお年寄りについての考えを伝え合って、もっと深く分かり合いたい」という意欲を高め、「お年寄りのイメージを分かりやすく伝えるために文の組み立てや述べ方をどう工夫すればいいだろう。」と問いを焦点化することを期待する。

次に、段落相互の関係を考えて一人一人が書いた「感想・意見文」の下書きをもとにした対話的活動の場を設定する。自分と4年1組の仲間との関係に応じて、自分の一番伝えたいお年寄りのイメージをはっきりさせるために、適切な段落相互の関係や文の述べ方について比較検討しながら考え、表現を選択・決定していく姿を期待する。

2. 単元の構想

(1) 単元目標

構想の仕方や記述の方法について意味マップをもとに仲間と交流をしたり、モデル教材文のよさを検討したりする中で、お年寄りのイメージが明確になるように述べ方を工夫したり、序論、本論、結論に書く内容を考えながら段落相互の関係を工夫したりすると、自分のお年寄りのイメージが分かりやすく伝わり、仲間とより深く分かり合えることを理解し、4年1組の仲間に伝えたいことを明確にした文章を書くことができる。

(2) 追求の構想（11時間）

1次 お年寄りについてのイメージを4年1組の仲間に伝える作文を書く計画を立てよう（2時間）

1学期の総合学習の活動を振り返り、お年寄りのイメージについて「感想・意見文」を書こう。

体験を通して考えたお年寄りについてのイメージを4年1組の仲間に伝えよう。



2次 ふれあ体験前後のお年寄りのイメージとその理由を書いた意味マップをもとに作文を書こう（7時間）

意味マップを書いて、意味マップをもとにアドバイスし合おう。

◎お年寄りのイメージをもっと分かりやすく4年1組の仲間に伝えるために文の組み立てや述べ方をどう工夫すればいいのだろう。

モデル教材文をもとに文の組み立てや文章表現について話し合おう。

「感想・意見文」の下書きをもとに対話的活動で推敲のポイントを話し合おう。

仲間と対話的活動をしてアドバイスし合ったら作文がよくなった。清書して読んでもらおう。



3次 推敲と清書をして仲間に読んでもらおう（2時間）

◎完成させた「感想・意見文」を4年1組の仲間に分かりやすく伝えて感想を聞こう。

4年1組の仲間から分かってもらって本当によかった。分かり合えた感じがする。

4年1組の仲間から感想を教えてもらったことに対してメッセージを書こう。



3. 授業の実際

(1) お年寄りのイメージについて「感想・意見文」を書いて4年1組の仲間に伝えたい

総合学習で四郎丸コミュニティーセンターとまちだ園を訪問して、お年寄りとおふれあった子どもたち。

ふれあい体験後、感想を交流し合うと、お年寄りのイメージが変わった子どもがたくさんいた。しかし、なぜ変わったのか理由がはっきりしなかった。そこで、教師から、「どうしてそのお年寄りのイメージになったのかを作文に書くと、理由がはっきりするのではないか。」と提案した。「うん。それはいい。賛成。」と声を上げる子どもたち。こうして、学習がスタートした。



まちだ園でお年寄りに語りかける彩子さん

彩子さんは、体験したことを順序立てて書いたり、モデル教材文や仲間の表現のよさをすぐに自分の作文

に取り入れようとしていたりする子どもでもある。本単元では自分と相手の関係に応じて、どうすれば自分のお年寄りのイメージが伝わるのかじっくりと考え、モデル教材文や仲間の表現と自分の表現とを比較検討して練り直していく姿を期待した。

作文を書いた後、「最初にした作文が学級の仲間に伝わるか確かめてみたい。」という意見を受けて、仲間と作文を読み合うことにした。

どうしたら自分のお年寄りのイメージとその理由をはっきり伝えられるのかな。

(彩子)



お年寄りの大体のイメージは分かったけれど、理由をもっと書かないとよく分からないよ。
(裕三)

作文を互いに読み終わった後、学習計画について話し合った。

全く体験していない4年1組の仲間に自分のお年寄りのイメージが伝わるか読んでもらいたい。

お年寄りのイメージを伝えてから4年1組の仲間が、どんなお年寄りについての考えを持っているのか、伝え合って知りたい。

意味マップを書いて、書く内容をはっきりさせたい。

意味マップをもとに仲間とアドバイスし合いたい。

仲間の発言に大きく頷き、「賛成。」と手を挙げた彩子さんだった。そこで、次のように学習計画をまとめた。

○お年寄りとのふれあいを体験していない4年1組の仲間にお年寄りのイメージを「感想・意見文」で伝えよう。



①「感想・意見文」に書く内容を意味マップに書く。

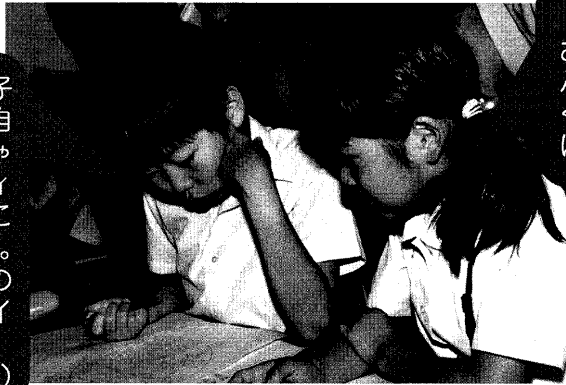
②意味マップをもとにした対話的活動をする。

(2) 意味マップをもとに対話的活動をしてアドバイスし合おう

子どもたちが意味マップに書いた後、お年寄りのイメージを端的に書いている子どもと経験したことを羅列的に書いている子どもなどを、教師が意図的にペアとして組み、対話的活動の場を設定した。

彩子さんは、はじめ勇二さんと対話的活動を行った。

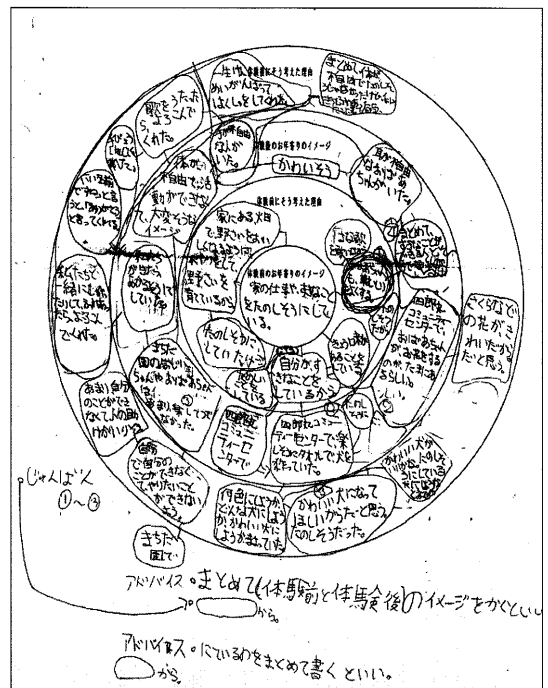
4年1組の人に体験の様子が分かるようにするために自分のおじいちゃん、おばあちゃんのこと、四郎丸コミュニティセンターのことまちだ園のこの順で書き進めた方がいい。そして、体験前と体験後のイメージをまとめて書くとイメージがはっきりするよ。
(勇二)



まちだ園は体が不自由なお年寄りだったけれど、ふれあうと、元気になってくださった、というふうに書きたい。
(彩子)

この対話的活動をもとに彩子さんは、自分の意味マップに赤ペンで何か書き込もうとした。しかし、しばらく迷っていた。そこに教師が近づいていくと、「4年1組の仲間に納得してもらう作文にするために、もう少し他の仲間のアドバイスがほしい。」と話しかけてきた。対話的活動で自分の考えを述べたことで、伝えたい自分の考えがはっきりし、4年1組の仲間に自分の考えを理解してほしい、そして、考えを交流したいと思いを膨らませてきた彩子さんの姿である。

その後、他の仲間と意味マップをもとにさらに対話的活動を続けた彩子さん。信夫さんから「似ているものをまとめて簡単に分かりやすく書くといい。」というアドバイスをもらい、「具体的な体験の様子が書けていていいね。」とよさを伝えていた。仲間との対話的活動を終え、振り返りをノートに次のように書いた。



彩子さんの意味マップ

- ①ペアの人が具体的な様子や体験を書いている、いいと思いました。自分では様子などのイメージの理由を詳しく書くことは、できていたと思いました。
- ②まだ自分でできていなかったところは、順番が分かりにくかったことと、2つの体験を通して考えたお年寄りのイメージをまとめて書けなかったことです。

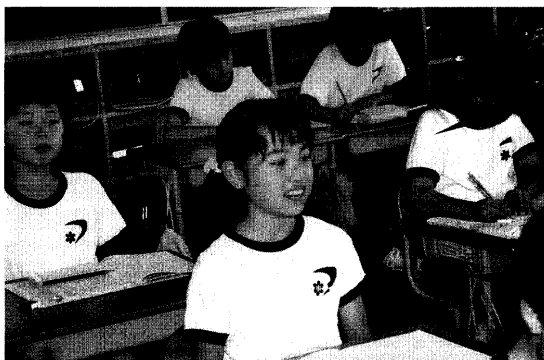
これは、4年1組の仲間と深く分かり合うための表現の見直しの視点として、書く順番という段落相互の関係やお年寄りのイメージやその理由を分かりやすくするための述べ方に絞り込んできた彩子さんの姿である。そこで、追求問題を、次のように設定した。

◎お年寄りのイメージをもっと分かりやすく4年1組の仲間に伝えるために、文の組み立てや述べ方をどう工夫すればいいだろう。

(3) 意味マップやモデル教材文をもとに「感想・意見文」の構想メモを書こう

教師は、まず、段落相互の関係の工夫の選択肢を広げるために、序論に体験前のイメージ、本論に具体的な体験、結論に体験後のイメージを書いたモデル教材文を作成して提示した。

読んで気づいたことについて出し合うと彩子さんは、次のように発言した。



モデル教材文のよさを発言する彩子さん

モデル教材文を読み、そのよさを話し合ったことで、自分の意見を読み手によく分かってもらう文の組み立てとして、「序論・本論・結論」があることが分かった。

私もモデル教材文のように結論の部分で自分のお年寄りのイメージをまとめて書くなどして、はっきり伝わるように書きたい。そして、イメージが変わった理由を本論で書きたい。

彩子さんは、モデル教材文の文の組み立てを取り入れ、構成メモに書き込んでいった。本論にイメージが変わった理由を書き終えると、前に書いた意味マップを見直し始めた。そして、構成メモの本論部分の空欄に意味マップに書かれていた項目を箇条書きで書き込んだ。その後、両方を見比べながら、どちらも消すことなく下書きに入る彩子さん。

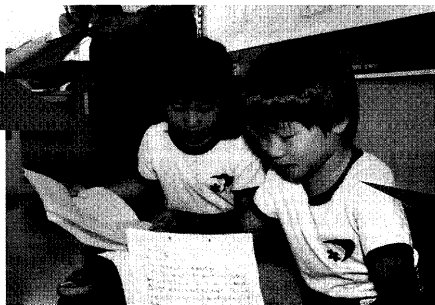
これは、モデル教材文の「序論・本論・結論」という文の組み立てのよさを取り入れながら、その中の本論の部分に書いた内容と意味マップから書かれた項目とを比較し、自分の述べる内容が表現できているか検討している彩子さんの姿である。

「お年寄りのイメージを作文に書いたけれど、実際にふれあっていない4年1組の仲間に考えが伝わるか心配。」という彩子さんの声を受け、下書きをもとにした対話的活動を組織した。

(4) 書き方のポイントを考えながら、下書きをもとにした対話的活動をして自分の作文を見直そう

彩子さんは、下記のように迷っていた。これは、以前に行った勇二さんとの対話的活動から、イメージをまとめて書くといいと感じていた彩子さんが、教師のモデル教材文の結論部分に詳しくさを読み取り、まとめて簡単に書くことと詳しく書くことの両方に価値を感じてきている姿である。

結論の部分のお年寄りのイメージを詳しく書くか、まとめて簡単に書くか迷っている。(彩子)



体験していない4年1組の人たちが読むのだから、詳しく書いた方がいい。
(陽一)

次に対話的活動を行った裕三さんにも「詳しく書いた方がよく分かるよ。」と言われ、しばらく考え込んだ後に、結論部分のお年寄りのイメージを詳しく書き直した。そして、下記のように振り返った。

仲間から、最後のまとめの部分を詳しく書くと伝わると言われました。私は詳しくよりもまとめた方がいいと思ったけれど、ちょっと長くして詳しく書いてみたら、そっちの方がよかったので、仲間のアドバイスを取り入れることにしました。

これは、ペアのアドバイスを受けて実際に書いてみて、よさを確かめることで選択決定した彩子さんの姿である。

彩子さんは、次のように作文を清書した。

変わった私のお年寄りのイメージ
彩子
私のお年寄りのイメージは、家の仕事や好きなことを楽しそうにしているイメージだった。でも、まちだ園で見学してそのイメージが大きく変わった。まちだ園には、ほとんど耳が聞こえない人やしゃべれない人がたくさんいた。でも、一緒にふれあうことにした。最初は、あまりふれあえなかつたけれど、だんだん仲良くなることができた。しばらくしてから、私たちが歌を歌った。みなさんは一生けん命聞いてくれた。手拍子もしてくれた。歌を歌った後に、お年寄りとおく手をした。最後のひととおく手をしようとしたら、そのお年寄りはニコニコして私の目をしっかりと見てしゃべれないのに、一生けん命私に気持ちを伝えようとしていた。「ありがとう。歌上手だったよ。」と、言っている気がした。私は、四郎丸コミュニケーションセンターで歌を歌った時にほめてもらったときと同じくらいうれしかった。
私は、このまちだ園での見学を通して、四郎丸の時みたいなお年寄りは「家の仕事や好きなことを楽しそうにしているイメージ」だったのが、「体が不自由で楽しいことができない人でも心が通じる人」というイメージに変化した。私は、最初、元気なお年寄りかどうかを見て心が通じるのか、通じないかを見分けていた。しかし、元氣そうじゃなくても、体が不自由な人でも心が通じるんだなあ、と思った。
これから、すぐにはできないと思うけれど体が不自由で心が通じないと思うっても、お世話をして役に立つようにしたい。このことを仲間と一緒にすることができたら、私は、すごいと思う。

彩子さんは、4年1組の仲間実際に作文を読んでもらった。「2人の仲間に読んでもらって、お年寄りのイメージやお年寄りとおく心が通じた様子がよく分かったとコメントしてもらってうれしかった。また、がんばって作文を書きたい。」と学習を振り返っていた。実際に読んでもらい、自分の考えを理解してもらったことで満足感をもち、次の表現への意欲を高めている姿である。

Ⅲ 成果と課題

1. 対話的活動は「感性」と「科学的なものの見方・考え方」に働く

対話的活動は、4年1組の仲間に自分の考えを理解してほしい、そして、考えを交流したいと、相手意識を拡張することや、伝えたい相手を常に意識し、相手に応じた表現を比較検討しながら、選択・決定することに働いた。4年1組の仲間と考えを交流したいと「目的としての相手意識」に高まることで、「手段としての相手意識」に留まっていたこれまでの自分の実践よりも、繰り返し「相手により伝わるにはどういう表現をすればいいのか」と、粘り強く比較検討する姿が見られたことは、成果の一つである。

実践を通して、対話的活動が成立するには、次の2つの条件が必要であることが分かった。

- ①書き手の意見が示されている意味マップや作文の下書きなど、対話的活動を支えるベースになるものが必要なこと。
- ②伝えたい相手はどんな状況の人であるか、伝えてどんな関係になりたいのかを常に取り入れてコメントし合うこと。

2. 対話的活動の形態を検討する必要がある

中学年では、「指摘・改善」という対話的活動の視点を設定した。本実践では表現のよさを認めた上で改善点を指摘したことで、自分の表現のよさを自覚しながら、文の組み立てやお年寄りのイメージの述べ方をよりよくしようと表現を検討する姿が見られたことは、成果の一つである。

しかし、高学年での「協働的解決」を目指した場合、中学年では、複数の具体的な修正方法を提示できる対話的活動の相手が必要となる。ペアで互いの表現を高めるコメントを述べ合えることが課題となる。そのためには、3人、4人などで行う対話的活動も視野に入れ、より効果的な対話的活動の要件を明らかにする必要がある。今後は対話的活動を単元のどの時間にどのような形態で位置づけていくとより効果的か、実践を通して検討していきたい。

<主な参考文献>

- 大西 道雄 1990 『意見文指導の研究』 溪水社
大西 道雄 2004 『作文指導における文章化過程指導の研究』 溪水社
村松 賢一 2001 『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習－理論と実践－』 明治図書